

臣道実践と仏教

一、時局と自覚

有史以来の大非常時、未曾有の超大非常時に遭遇せる日本、その日本に、今、生を享けて二千六百年の聖紀に遇い、八紘一宇の大盛事をまのあたり拝んだ一億の民、誰か尽忠報国の大志願に燃えないものがあるか。

十一月十日午前十一時二十五分、住岡夜晃、柳田西信、中村狂雨、桂千寿子の一行四人は、岡山県津山市鶴山城趾においてラジオを通して帝国の聖儀を拝し奉り、盛寿の万歳を唱和し、十一日は津山女子高等技芸学校の奉祝音楽会に列して、一場の講演をなし、生徒の演ずる劇に報国の至情に涙したことである。この日、これを書きはじめる。

今や世界は大動乱の火中に置かれてしまった。そして重々しくも急転回をとげつつある。それは言うまでもなく、旧体制から新体制へ、旧秩序から新秩序へ、旧勢力から新勢力、旧世界から新世界への線に添うてである。好いても好かなくても、世界は今、大転回をとげつつある。

転回はただ単に一つの世界から一つの世界への変転であるのか、この転回が、暗から光への、動乱から平和への展開であるのか、希くば、転回をして展開たらしめよ、畏くも天皇陛下は紀元二千六百年奉祝会において勅語を賜い、その中に「今や一大世変二際会スルモ平和ノ日ナラスシテ恢復セラレ万邦ト俱ニその慶ニ頼ラソコトヲ望ム」と宣せたもうた。真の平和が日ならずして来り、世界各国と共に、その幸慶を一にせしめたいとの大御心 聖慮広大、誰か感泣しないものがあるか。大御心を安じ奉らねばならぬ。

世界の広い地域を領有し、世界全人類の富を壟断し、搾取し続けて来た英米は、現状維持のために懸命になつている。この現状維持派が重苦しい憂鬱の中に、その展開を止めようとしても、新世界は、徐々に黎明の光を浴びて、東亜に、西欧に訪れつつある。

しかれども、我らは今この大事業の完成がいかに重大事であり、大難事であるかを知らねばならない。ほとんど有史以来の未曾有の大事業であるこの使命が、大使命であると共に、大困難であることを知らねばならない。であるから、我らは非常なる大覚悟を持ち、いかなる大苦難に遭うとも断じて疑怯退心せざる、不退転の大自覚と精進を持たなければならぬことは、まことに言うを待たないことである。

内閣情報部発行週報二〇八号の巻末には、

「この大事業が出来るか出来ないかの鍵は他でもない、国民各々の双肩にあります。」
と言ひ、「有史以来の一大困難に直面しつつ、しかも世界歴史転換の鍵をにぎる重大なる役割を自ら荷う」ことのためには、「千辛万苦はもとより覚悟の前」であると告げ、「そのためには一人々々がこの時局重大性に徹して、己れを空しゅうして国家の重大危局に投ずる覚悟を必要とするのであります。それはまず日本国民の全部が自己革新をし、自らの職分において御奉公することであります」と、国民に向つて「自らの新体制の確立」を要求している。これは又当然のことである。

己れを空しゅうして御奉公すること、それは、我ら仏教徒が、無我報謝の生活と、最初から聞きつづけている言葉ではないか。しからば仏教者ははたして、この大自覚の上に立って生きて来たであろうか。

二、この難局に当って

旧体制の思想生活の中心は自由主義であり、新体制の中核理念は、「大政翼賛の臣道実践」だとされる。

欧米の近代の思想は、まことに自由主義をもつてそのすべてとした。フランス革命を導火線としたる、いわゆる文芸復興期において、神々の死を宣言し、あらゆる権力を覆えして、その重圧を葬り、人間の自由を叫んで立つたのが白色人種たちであった。人間の自由の上に何者をも認めず、自由平等を以つてその生命とした。自由主義は、であるから民主主義であり、たとえ国王を戴くもそれは統治の機関にすぎない。彼等は自由を得る為には帝王すらこれを葬る。その左派は、ついに共産主義となり、その右派は民主主義となるとも、その根幹は同一なる自由主義に外ならない。今日、米国は崩壊せんとする英国を援助して、この自由主義をして最後の勝利者たらしめんがために必死の努力を続けている。

言うまでもなく、ドイツとイタリアとは、この自由主義を放棄して、全体主義を打ちたてた。そして国家のために個々の人間をあらしめんとして、組織化し、国民の生活をたたきかえた。指導者の人格的権威と、国民の服従の誓とによつて固められたこの組織体がいかに強力なものであり、強固なものであるかは、米国に次いで金の保有2量世界第二であった仏国が、あえない最後をとげたことで、はじめて実証だてられた。

我が国における新体制は、もとより万国無比の国体、皇道、かんながら惟神の道、一君万民の皇道精神によつて成就されることは言うまでもないことである。したがつて西洋の全体主義とは根本において大なる差違をもつていることである。日本はあくまで、一君万民、大御心を体して、皇道を翼賛するところに成就するのであるという根本的な考え方が明かにされたことはまことに当然のことである。

しかるに、日本には、明治大正昭和の初期にかけて、全く西洋の自由主義の思想が移入された。民本主義、社会主義、共産主義、自然主義、享楽主義、あらゆる西洋の思想や生活が大河の決するが如く輸入された。そうした主張の流れの中にあつて、仏教を生きて来た私たちには、今にして思い半ばにすぎるものがある。その頃私は決して赤にもなれなかつたし、西洋思想の子にはなれなかつた、したがつて私には、そうした方面からのあらゆる迫害や罵倒がつきものだった。

しかし今更に、仏道に一貫せしめられたことに大いなる喜びを感じる。日本は今、過去の誤りから来る自由主義的薰習力と戦っている。この内部への戦いが、雄々しくも成就されないことに、何で真の力が生れよう。西洋の個人主義的な欲望合理化の考え方が悪いばかりではない。人間は本来、貪欲瞋恚愚痴の三毒煩惱の持ち主である。それを持つているところへ、それを喜ばし、それに応ずることを聞かせたのである。内にあればこそ応じたのである。

今こそ内に帰らねばならぬ時が来た、民族本然の相に真に立ち帰らねばならぬ時が来たのである。我らは、尊き皇国の相を至るところに拝むと共に、深憂に堪えない幾多の悲しい国民の相を見る。一億一心がかかけ声ばかりに終つてはならない。もしこの大國難に當つて事完遂せずんば、千載拭うべからざる悔いを残すであろう。されば、皇国本然の姿に帰つて、この難局に當らなくてはならない。

三、忠臣か逆臣か

明治維新において民族は長い過去の誤りを捨てて日本本然の相に帰つた。昭和維新においてもまた過去の誤りを懺悔して日本本然の姿に帰らねばならない。維新とて、万事新まることではあつても、日本における限り、復古することである。雑多に不統一に散漫に描き出されたる遠心的な一切を中心に帰せしめ、寂然として変らざる皇国の真の相に立ち帰らしめることである。天皇帰一というも、肇国の精神というも、すべて、一切の現前の相の雑毒海を超えて、久遠の真相に帰り、やがてこれに統一せられ、一心の顕現態としての国家組織を造ることである。

であるから、日本の新体制とは、真の旧体制、天祖の神勅、神武建国の大御心の現代的表現である。二千六百年の歴史は、これを疊んで、上御一人の上に拝し奉れば、大御心の聖なる御一心であり、これを国民の上に求むれば、無我奉公の一心である。教育勅語に、億兆一心と仰せられ、一徳と仰せられるのがそれである。

日本の国土は、大御心のみ響流したまひて、その外に何ものも認むべきなき、純粹国土である。その外にあると思うは妄想雑念に外ならない、しかして、この妄想雑念の八万四千の諸相、大御心を悩まし奉り、日本本然の相をくらますのである。

3

もしそれ、一度自力我慢、邪見貪欲のみにものを言わせて、個我を守らんとすれば、たちまち己を国家と対立せしめ、国家を功利的欲念のために利用し、自らは、大樹を喰ふ胴虫となり、その葉を食う毛虫的存在となるであろう。

ああ、億々の毛虫、この大樹を食う。内観懺悔して、汝を至純絶対の地下水にまで掘り下げずば、国土の尊嚴は遂に汝において見出せないであろう。

しかるに、かくの如き毛虫を、獅子身中の虫を転成して、皇国の忠良たらしめる道は、ただ教化の問題である。教育の問題である。

西洋の諸国には、血の粛正という政治があり、民主主義とて、人民の貪欲の手に権利の握られた国がある。日本においては、氣に入らぬ者を斬つていい国ではない。それかと言つて国民の権利を土台とする国でもない。徳化の国である。全一なる徳は円融の徳を持つ。円融とは、親鸞聖人の言によれば、転悪成徳の無碍相である。徳は一切の悪を転じて徳とする。氷を解かして水にするように。

日本の真諦は、上御一人の御聖徳に依つて皇化せられ、逆悪を転じて忠良なる臣民たらしめたもうところにある。忠臣か逆賊か、そはただ紙一枚の差である。

足利尊氏は後醍醐天皇の恩寵に甘え奉り、皇恩を名利心の穢悪によつて汚し奉り、ついに大逆臣となつた。「歌書よりも軍書に悲し青野山」国民永遠の悲涙は、ただ、一個の自力名利の邪心に根ざす。しかるに彼とても人間的な心はあり、いわゆる七朝の国師無窓国師について仏道を学び、禅門の人となつた。彼は、帝崩御の後、御追悼のために仏事を営み、塔堂を建て、全国に安国寺を建て、聖慮を慰め奉らんとした。

哀れなる哉、無窓国師の徳を以つてして、尊氏の頭を日本国土の大地につけしめること能はず、彼が心中に巣くう妄念の大悪魔をして、人格の王座を去らしむること能わず、頭を帰依の大地につけたかの如くにして、寸尺を余し、無為自然の電流断絶してついに転悪成徳の大地を得ず、万古に逆臣の標本となる。哀れなるかな、悲しきかな、何故に仏門に帰しつつ、妄念妄想を内観凝視して逆悪に徹し、親鸞聖人の如く「いづれの行も及びがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし」と、機の真相に徹して全我を投げ出し、正法に摂取せられ、大悲の光懐に更生して、仏凡一如の境を直観し得なかつたか。

御恩の大地に頭を下げきつて廻心懺悔し得たならば、彼もまた大忠臣の一人となつたであろう。ああ、一個の名利に囚われつつ、それを知らず、陛下の大政を翼賛せんとするもの、もし一人にてもかかるものあるならば、その心中に逆臣尊氏あつて潜む。なんぞ、真実なる大政翼賛の「臣道実践」あらんやである。「己を空しうする」ここにのみ大御心は届きたもう。大道は顕現し、皇道の真面目は發揮せられるのである。であるから、皇道帰一の新体制は、実にここに基調をおくのである。己を空しうするところのみ、一億一心の臣道はある。無我無心の境を失つて、個我の邪見のみ主張されんか、一は二となり、二は四となつて、たとえ形は如何に美しく整えられても、一袋の中、限りなき雑毒海を出現するであろう。しかして無我無心の境は、これを言うに易くして、得るに最難事であり、行うに極難事である。かかるが故に世の智者は、この為に一生不断の工夫をこらし、不退の聞法精進を続けるのである。

四、喜

国民学校の国民科の教授方針の第一項には、

「(一) 皇国に生れたる喜びを感じしめ、敬神奉公の真義を体得せしむること。」

とある。生きることに喜びがなく、感謝がないならば、道を生きるの、御奉公するの、と言つたとて、真には成り立たない、というのが私の長い間の主張であつた。日本に生れて、しかも喜びを感じないところには、皇国の臣道は生れない。宗教家は、時に医者であり、心の煙突の掃除夫であり、心の下水の穴ざらえである。

正法は不可思議の世界である、如何に不幸に泣く人でも、その人にして正法に徹すれば、誰にでも念仏の世界、大信心の境が開いて来れば、如何なる不幸な人でも、そのありのまま、生の歓喜を獲得することを知りつくして来た。掘り下げられた魂の地下水、そこに信心歓喜が生れる。智慧の光明は心の奥庭をほのかに照す光である。

歓喜必ずしも道ではないが、道は必ず喜びである。

真の喜びは道と共にのみある。臣道実践の道もまた喜びと共にある。すでに、真の喜びは道と共にある。であるから、喜びを得んとすれば、まず道を獲なければならぬ。道を獲るならば必ず真の喜びが生れる、しかるに世の人は、喜びのない愚痴な心を、愚痴であると知らずに、その灰色な闇黒な生活の原因を外に求め、他人に背負わせようとする。そして自分が道に更生しようとはしないで、自暴自棄に陥つたり、世を呪つたりして、ますます喜びのない世界に陥ちてゆく。道を得ぬ限り、闇から足を洗うことは出来ない。

「皇国に生れたる喜びを感ぜしめ」皇国に生れた者の顕現すべき臣道が、皇国に生れたる喜びなくして、どうして顕現しよう。あまりにも当然すぎることである。けれども私はこれを見た時、次の如く考えた。それは、「喜びを感ぜしめ」という前に「喜びを感じ」と直して、まず教育者そのものの上に持つて来なくてはならないのではないか。教育者がすべて、まず喜びを感じているであろうか。自ら喜びなくして人を喜ばすことが出来ようか。問題はここにあると思う。

「先生、有難うございます。私は何という幸福者でございましたでしょう。毎日々々をまことにうれしく教壇に立たせて頂きます。数年前のあの暗かった生活、相済まないこととございました。境遇を怨み、父母を恨み、はては、いつそ死んでやろうか等と考えていた頃の私は、何という愚なものでございましたでしょう。身の上が変わりはありませんが、日曜日には、家に帰って老いた父母の農業の手伝いをしますのにも、ちつとも苦痛を感じませぬ。泣いて感謝する母の真情に涙すること御座います。」

家庭の事情から、結婚の時機も失つて、父母を助けなければならなかった、この不幸に泣いた女先生が、手をついて嬉し泣きに泣きながらの告白である。「皇国に生れたる喜びを感じ」まず、先生達の上に成就されなければならぬ。そしてそれを思うと、悲しい心になつてしまふ。人生の真相をあまりに知るが故である。個人生活、家庭生活の上では、無味乾燥な、あるいは暗い生活を続けつつ、しかも、皇国に生れたことを感謝するというようなことは出来ないことだからである。人間の生きるころ、重い業苦は複雑な相においてまきおこつて来る。それらの重苦の中にあつて、不転の喜びを獲得するということは、容易なことではあり得ない。少くとも私のような人間にとっては、これほど大きな問題はなかつた。眞実心から横川の聖者、首楞嚴院の源信和尚と共に「人間に生るゝこと大きなよろこびなり」といい得るに至るまでには、半生のかすかなれども聞法精進を要した。しかし、それは必ずしも長い年月を要するのではない。家を捨てての修業を必要とするのではないし、必ずしも私のような道を行かねばならないのではないが、しかし、悪業重き者がこのことを眞に解決しようとするれば、眞剣なる願と教法を聞くということ抜きにしては獲ることが出来ないことを告げたらいいのである。

そんな難しいことを言わなくても、世の多くの人は大したこともなく喜んで生きているのではないか。そんなことを問題にする人は少いではないか、という人があるかも知れない。しかし、私はこう考える。生れつき体が丈夫で頭がよくて、小学校を首席で、一中、一高、東大と進み、両親揃つていて、金に不自由したことがないという幸福な人がある。そうした幸福な人によらねば国家の幹部は生れない。これによらねば優秀なる指導者は出来ないが故に、こうした人が大事であることはもちろんであるが、その人の持つ喜びを以つて、これを世の多くの重苦に泣く人の上に適用することは出来ない。社会の隅々を覗けば、五濁身に逼り、言うも悲惨な人がある。これもまた陛下の赤子である。恵まれた幸福の程度によつて、多くは、まあまあ何とか暮している。それが、眞の皇国に生れたる喜びであろうか。それはすべて個我的な喜びで

あつて、皇国に生を享けさせて頂いた喜びではない、皇国において受けた幸福である。

ここにおいて真の喜びということが問題となる。真の喜びは何から生れるのか、それはただ真に道を獲ることによつてのみ生れるのである。仏教においては、順境に驕ることを正しいとせず、逆境に泣き沈むことを許さず、順逆二境を超えて、永遠の道の上に更生することを以つて救いとするのもこの為である。せつかく尊き日本に生れながらも、無明の黒闇に包まれて道を獲ないもの、これを救つて明朗なる道に更生せしめ、無我奉公に出発せしめるところに、正しい宗教の使命がある。

五、蕩除心垢

しかるに世には、こういうことを言う人がある。「仏教によつて暗い生活が明るくなり、ありがたく喜びに満ちた生活が生れることは認めようが、しかし、それは信仰の喜びであつて、日本に生れた喜びではないのではないか。」と。あるいは又、「日本には、惟紳の道がある。しかるに、それを知らずに、外国から来た仏教など信ずることがいるものか。」あるいは言う、「宗教など信じなくても立派な日本人になることは出来る。」等々、世間から色々な声を聞くことである。最近になつては、非国民よばわりをする人さえある。何と考へたらいいのであろうか。

日本人である以上 天皇陛下に忠義を尽くさなくてはならぬことは誰でもあたりまえのことである。これは日本臣民の本然の相である。何とかかとか言つていようでも、いざとなれば、大君のために生き、大君の御楯として惜しみなく散つてゆく、それは日本国体の精華である。そうなればならぬことは議論も問答も要しないことである。

しかれば何故に仏教が必要であるか。それは、仏教の教えが国体と矛盾せず、矛盾せぬのみか、大和民族の無意識界にあるもの、本来民族国土に内在するものを、教えによつて引出したのである。何を引出すか、それは無我の大精神である。無我の心、無我の大精神は、その中に無限の徳を撰してはいるが、畢竟するに、真実の智慧であり、真実の智慧は、真実の大慈悲である。この智慧即慈悲の無我の心こそ、大乘仏教の法印である。これを我がものと説けば聖道門であり、これを我ならぬものと体認すれば浄土門である。我らは、これを我がものと考えるよりも、我ならぬもの、我を超えて、三世十方に普遍なる大行が、我に廻向顕現すると信知する、それが自然であるが故に、自覚内観の境において、かく絶対他方として体感するのである。

しかれども、大信心は大慈悲である、大信心は智慧である。この無我の心、よく報謝の生活を成就するのである。しかるに、この智慧光と大慈悲の一如なる相を阿弥陀というのである。阿弥陀とはこれを訳して無量寿といい、無量光という。無量寿とは大慈悲であり、無量光とは智慧光である。されば阿弥陀とは無我の信の本質に外ならず、阿弥陀仏に生きるとは、無我の心に生きることである。

しかるに、言う者は、「それは、阿弥陀仏に無我に生きるのであつて、阿弥陀に無我に生きたとて、それが忠良なる国民になつたとは言えない。」というであろう。

答えて云く、もし仏教に忠実に生きたかの如く見えて、日本国民として不忠不孝ならば、それは真の仏教に生きたものとは言えない。我らはかつて、信心の行者にし

て、親に不孝なるものを見ない。貪瞋の煩惱を持ちつつ、貪瞋の二河を超えて、大信に生きるものは、そのまま無我報謝の行者であり、君に向つては忠、親に向つては孝、夫婦相和、兄弟友和、行くとして一切可ならざるなき相を見るのである。それは実つた稲が誰に向つても頭を下げているが如くである。

彼のキリスト教の一派が、唯一の神を信ずるとて、神社に頭を下げぬものがあつたが如きとは根本の相違である。天照大神のみに頭を下げてこれを拝し奉るは、仏教徒の衷心よりなすところである。天照大神の今日の御姿を天皇と申し奉るのである。されば上御一人を現人神と崇仰し奉るのである。されば天照大神は天皇の久遠の相にてまします。

天皇は大神の現実の御姿にてまします。されば、たとえ伊勢の大廟に幾十度礼拝を捧ぐとも、上御一人の大御心に生きずば、不忠と言われるであろう。されば、眞の教化によつて無我の自覚に至り、その心を持つて上御一人に対し奉るもの即ち眞の仏教徒である。

あるいは云わん「我らはかかる道を要せず、直ちに忠孝を實踐すれば足るではないか。仏教などに入るものは愚廻と言ふべし。」と。

そう思われる人は、もちろんそれでよいであろう。しかし我らはあまりにも妄念妄想の煩惱の垢にまみれたる存在である。

明治天皇の御製に仰せられる。

「浅みどりすみわたりたる大空の広きをおのが心ともがな。

さしのぼる朝日の如くさわやかに持たまほしきは心なりけり。」

ともすれば、この心狭くふさがりて、大空の広さを失い、明朗さわやかに心を持つること能わざるものは、如何すべきであろうか。しばらく御猶予を乞ひ奉つて、この心を養い、大御心に対へ奉らねばならぬ。かくいう私の如きは、この道光明朗を眞に獲るためには幾年を要したことである。たしかに愚廻に違いないことである。

『大無量寿経』に浄土の宝水の徳を説きて言く、

「調和冷暖にして自然に意に随ふ。神を開き、体を悦ばしめ、心垢を蕩除す。」と。

心の垢を除き清めて、開神悦体と、精神を開明ならしめ、体を悦ばしむるの謂である。

國に報ぜんとすれば「まず健康」という。健康を第一に置くとして不忠というものなきが如く、心を養い、心を洗い、心の道光明朗を得て、この鴻恩を報ぜんとするのが、何故に非国民であろう。

六、教と道

世

には、宗教などの全く不必要であることを主張する人があり、更に、明治維新の時、廃仏毀釈の運動があつたように、今また、昭和維新に当つても、仏教等の無用を主張する人もあるようである。あるいは又、自己の救いとか、自らの生きる道とか、そうしたことを求めることは、その出発において既に個人的であつて、日本においては許されざる個人主義である等と主張する人もある。我らはこれをいかに受け取るべきであろうか。

我らは日本国民である。日本の真の姿が惟神の大道にあることは、今さら言うを要しないことである。敬神崇祖と言ひ、忠孝一致と言ひ、義勇奉公と言ふも、畢竟己を忘れて大君の御為には身命を捧げて御奉公申し上げることに外ならぬ。この臣道実践こそ、我らの生くべき唯一絶対の道であることはまことに無上の国体の精華にして、今さら片言隻句のさしはさむべき余地なきこと、日月と共に明かなことである。我らは、それ故に仏教の必要であることを信ずるものである、それ故に仏教等は不必要であるとの議論には、どうしても首肯することが出来ない。それはあまりに慈悲の無い言葉である。この世の真相に無関心な冷たい考え方である。

幾度もくり返すが如く、人生は具体的には複雑な苦悩につづられたものである。五濁身にせまり、四苦八苦の波高き生死の海である。老の身が一人息子を失つて生きることの希望も力も失つたもの、人間の愛憎の毒素に泣き苦しむ諸相、一生を病弱で終らねばならぬもの、重い荷物の下敷になつて運命を呪うもの、悪逆の父を持ち、邪見な母をもつて、ひな形のような孝道が成就されないうで悪業に泣く子、貪欲と貪欲、瞋恚と瞋恚、愚痴と愚痴、三毒の波浪高き大海に、自暴自棄に陥るあり、国家が何であろうと、己一人の幸福に我が世の春を歌うことのみ知つた人、こうしたことをあげて行けば限りのないことではあるが、およそ社会の底をたたけば、こうした業苦の中で喘ぎながら生きているのが人間である。

それに対して、個人的な苦悩など数えあげている者は非国民だという。それはそうではある、それは、お上の御用を務めなければならぬ身が、肉体の病氣によつて務めが出来ない時、申しわけのない不忠であると同様である。しかもその病氣にかゝるの8がすべての人間である。肉体に病氣があると共に心にも病がある。この心の病を悪というのである。心の病、まことに心の病が万人の胸に巣くい、万人を苦しめる。光のない生活、歓びも力もない生活、我執貪欲の生活、名利煩惱の生活等、その心の病人が、心の病を治す道にまず進み、その精神を養ひ修めて、光と力と歓びに更生して、以つて皇民として力強く働かして頂くこと、それが何故に臣道実践に反し、非国民なのであろうか。

親鸞聖人は、教行信証の信巻に、道綽の『安樂集』を引いて仰せられる。云く

「諸部の大乘によりて説聴の方軌を明さば、大集経に云く『説法の者においては、帝王の想を作せ、拔苦の想を作せ。所説之法をば、甘露の想を作せ。醍醐の想を作せ。それ聴法の者をば、増上勝解の想を作せ、癒病の想を作せ』と。

これ、聖人自ら、この世を病院となし、自らを病人と自覚し、薬餌としての仏道を求められたことを示されたものである。

心の病、「俺には心の病など無い、したがつて俺は忠良な臣民である」と言う人があ
るならば、又何をか言わん。しかるに、我らは、古の聖賢が、その徳百世に薫るに
かわらず、かえつて心中の賊を亡ぼすに難きを歎じ、善を見て移ること能わず、悪を
見て改むること能わざるを悲しんでいられるのを見ると共に、何等の徳なき我らがか
えつて病毒を散布しつつ、しかも自ら難治の重患たるを知らない哀れきを見ること
である。

不遇不幸至らざるなき過去を持つて老いたる人、人生の隅っこに世の重苦に泣く人、等々のそれらの人が、その中から、ほんとうの解決と力とを獲ようとして宗教を求め。そんな愚者敗残者が国のために何になる。我らが対象は国家の中堅である。青年である。しかしその中堅も青年も一歩間違えばその身ではないか、いわんや日本においては一億の臣ことごとく陛下の赤子である。いかなる哀れなる一人でも粗末に扱われていいものか。皆、おほみたからである。み民である。恵まれざる最後の一人、その一人と共に泣き、共に道を求めて、衷心の願に更生せしめ、光と歎びと力と得て歩みぬかれた親鸞の道の尊いことを知るものである。内に虚仮不実を持ち、外に賢善を装って、しかも何時しかに病膏盲こうもうに入つて、重患たるを忘れてるのが凡夫ではないか。それを救う道は健全なる宗教である。

世には、生れながらにして道を行じ、大我顕現の人があるというかも知れない。しかし、古今の聖賢に一人でも生れながら聖賢があつたであろうか。みな、血みどろの求道精進を経て、己が心内の大魔王と戦い、ついに普徧の大道を自覚したのではないか。その始めにおいては個我の解脱を求めたのに違いないが、その至れるところは無我普徧の大道であつた。大我顕現の真人格であつた。

世の智者よ、真実教化の道を封じて、しかも人をして「真実の臣道を行け」というが如き無理を、大衆に強いることなかれ。人は教ふることによつてのみ道に生きる。

七、仏教者の反省

「仏法には無我にて候。」

それは真に、仏教の第一の提言であり、ほとんどそのすべてである。であるが故に、仏教者であるとは、無我の大精神に生きる者のことに外ならない。智慧ということも、慈悲ということも、信心ということも、念仏ということも、すべてこの無我の心を成就することに外ならない。

仏教をもつてすれば「我」こそは人格成立の根本を破壊するものである。一切の悪は「我」より生れ、一切の闇は「我」によつて拡り、道も徳も光も力も歎びもすべてを失わしめて、無功徳の人たらしめるものは、実に「我」が心内に巣くうが故であると説かれる。真宗にいわゆる自力の迷情とは、この「我」に外ならないのである。「我」一度動けば、たとえ道を行じ、善をなすが如く見ゆるも、必ず、その衷心には、個人の幸福、個我の自由、自己の栄達、等々すべて己の貪欲を中心に生きるに至るのである。もしそれ、この「我」にして宗教を生み、宗教を求むれば、必ず、己れ一個の災難をのがれ、その幸福の増長を祈願する所の迷信となるであろう。

釈尊が何故に高き文化を築き上げたる当時印度の婆羅門の教えを棄てたのであるか。彼等が求めたる天上界のすべてを迷界の一部となしたのであるか、これすべてが個我の幸福を追求する「我」の発展に過ぎなかつたが故である。釈尊は遂に、真実の智慧によつて涅槃を開覚して大我常住の法身を体解し、その法身自爾の徳たる大慈悲に依つて、一切衆生と己とを一体と感ぜしめ、小我の悪魔を亡ぼして、一切衆生と運命を一にして、一切群生の為に永劫の大苦悩をも苦悩とせざる誓願に生きかえつたのである。

やがて我朝親鸞聖人は、一切を個我の幸福のためにせんとする心を疑惑と呼び、自力と教え、雑業雑修と示して、「千中無一」と戒めた。かくの如き「我」の功利心の排除は、ひとり我が宗に徹底して、この個我の幸福のために祈る心を地獄の業となし、商売繁昌、現世安穩、病氣平癒、等々の邪念を神仏に運んでこれを求むる一人の人すら、その末流中に無きに至った。

その眞実宗教を示して

「金剛の眞心を獲得するなり。本願力廻向の大信心海なるが故に破壊すべからず、之を金剛の如しと喩ふるなり。」

と示し、一切の功利的欲念を超えたる信念を顕しては

「念仏して地獄に堕ちたりとも、更に後悔すべからず候」

と絶叫し、その深き内観凝視の世界を示しては「地獄一定」と言い、愚禿と名告り、ただ、普偏の純粹道義に生きて、他の一切を求めず、全我報恩謝徳の大道を示されたのであった。

しかるに世に仏教のこの大信念を失つて、あるいは外道の如く、現世の幸福、己一人のいわゆる御利益を仏菩薩等に求め、あるいは、病氣平癒等の祈祷をなし、あるいは死後の極楽をのみ求める等、皆これ衆生の迷惑を教化せずして、かえつて人間を迷妄に投じて邪路に入れるものである。語を仏教に借るといえども、外道の「我」を出でざるべし。無明の小我を、この世に満さんとするも、未来におしすゝめるも、共に迷妄に外ならず。かかる仏教の現状、果してこれであるか。

普偏の不行、自覚の本質に顕現して、小我のトーチカを粉碎して、無我清淨眞実の大信心を成じて、人格成立の根本的條件の満足を成就するもの即ち仏教である。しかるに、何時しかに、他力本願の語は、ジャーナリストの、無力依頼心の徒を侮辱する文字となり、聖道諸宗は現世祈祷の対象となつて、からくも命脈をつながが如きに至つたのは、これまつたく、懈怠と憍慢とより外なき仏教徒の、長き無自覚な歩みが、かくの如くさせたのである。祖師の遺徳に餓鬼的な寄生を続けて、人間の幸福名利貪欲の満足の足場となし、祖師の教えを眞剣に受け取つて如実に修業し、無我の大信心を成就することを忘れたが故である。

仏教を滅すものは仏教徒である。親鸞聖人の言葉を借るなれば、御消息集に云く

「仏法をば破る人なし、仏法者の破るにたとへたるには、獅子の身中の虫の、獅子をくらふが如しと候へば、念仏者の破り得げ候なり。」と。

まことに然りといふべきである。宗教家に宗教なきは、米屋に米無きが如くである。宗教家に宗教なくして名利があり、信心なくして徒食があり、正信なくして迷妄があるならば、それは既に病その心腑を犯せるものである。ここにおいてもし自覚の癩病なくば、必ず外科的手術が加えられるであろう。しかるに眞実宗教は決して腐るものでなく、病むものでないが故に、必ず新しい形を生み、新らしく正法に忠実なる人を招喚して、その上に生きるであろう。

故に、我らは時代の中立つて、何が起ろうと聖人の「よきことにて候」の一語を思うものである。眞実宗教は滅びず、しかも眞実宗教に反する形態は滅ぶである

う。であるが故にいよいよ正法に忠実に生きねばならない。今やまことに、眞実自覚の成就さるべき秋である。

八、臣道実践

日本はいわゆる日域大乘相応の地である。大乘仏教は日本に来て初めてその大成を見たのである。これまったく我が国体の徳の尊さによるのである。国土の恩、国体の恵みなくして、如何して文化の華が咲き得るであろうか。国土の徳によって仏教は栄え、仏教の力によって日本の国土に内在する日本の眞価は引き出され、日本の眞面目は發揮せられて来たのである。

今や、世界は大動乱の渦中にあり、しかも新世界の黎明は枢軸国家群の歩みを通して顕われつつあり。生をこの光栄の時に享け、この尊嚴なる国土に生きるもの、御奉公の実を挙げないでいいものか。天皇帰一の大旗はおし立てられた。臣道実践の大道は明かに顕示された。上は近衛総理大臣より、下は我々一葉一片の存在まで、東亜新秩序建設の大使命、八紘一字の大御心顕現という、無上の大理想に向つて、一致団結せなければならぬ大非常時である。

深甚微妙の仏化を受けざる人すら、よく忠孝の大道を行ずるに、ましてや無我金剛の大信力に住持せられるもの、何で無我の奉公なくしてよからうか。お国のためなれば、たとえ、この身を火の中、水の中に没するとも本望である。区々たる分野の利害を主張すべき秋ではない。我らの戦いは、皇道精神による東亜建設の聖戦である。領土的野心に非ず、権力の覇業に非ず、大御心にまつろわぬ内外の妖雲を聖戦によつて払い、自ら搾取せず、他をして搾取せしめず、各国各民族各々その本然の相に生きて、共に助け、共に榮えて、もつて眞実の光を東亜にあらせんとする聖戦である。

辛苦の末に楽を求めず、幾十年を要すとも、民族の大理想、皇国の使命、必ず成就しなければならぬ未曾有の大事業である。祖先二千六百年の歴史を背景に、雄々しくも我らの時代において、この聖業に出発したのである。これを起さんとして起るものに非ず、止めんとして止まるものに非ず。天の時、来り、時の機運、熟して、自然に歴史的回天の事業は展開されたのである。我らはこの時に當つていよいよ大乘仏教の眞意義を發揮して、この大恩に報じなくてはならない。よつて左に我らの覚悟を定めて、以つて上御一人に対する御誓としたい。

一。一死奉公の大覚悟を持つべし。

酷暑に水なく、寒冷に火なく、一死、君の御楯と散り、敵地深く愛機と共に自爆する皇軍の勇士を憶え。一人息子をみ国に捧げたる母を思え。一死奉公の覚悟は、百千の重苦煩悶を汝の肩より取り去るべし。

二。感謝して明朗に今日一日を働くべし。

明朗感謝のうちのみ無限の力湧く。心に正法の食を摂りて信心歡喜を獲、口に報謝の念仏あり。身に報謝の生活ありて、今日一日錦の上に生かさるべし。感謝の明朗なきところ、全我報謝の生活あるべからず。

三。一切の物資を尊重すべし。

合掌して感謝の言を宣べて三度の食を頂くは我らの常である。一粒の米、一本のマツチ、一枚の紙まで、これを粗末にすべからず、これみな私の物に非ず。

四。不平不足を言うべからず。

三度の食事を未だ一度も欠かしたることなく、一度の爆撃の憂目うきめを見たることなく、念仏の口、封じられたることなし。大事の前の小事について不平不足を思うべからず。身の幸を感謝して如何なる不足も忍ぶべし。仏者の生活は謙忍の二字につく。

五。職域奉公の実を挙ぐべし。

月給が上ろうが上るまいが、人が知ろうが知るまいが、すべての職域にあつて、仮令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔。君の国土に、君の御恵みを頂き、君の物を作り、君の聖業に翼賛し奉る。この自覚ある者には、安住とよろこび、自然に身にあらん。

六。上意下達のすべてを忠実に実践すべし。

上下一致、官民一体、渾然として、皇国独自の真体制敷かれるとも、一人の遵奉せざる者あらば、完璧を期すべからず。臣道実践の具体相は、一糸乱れぬ国民の行動にあり。上意の下達せられるところ、必ずこれを遵守すべし。上行下靡とは、聖徳太子十七条憲法の承詔必謹章の御言である。

七。己を充実して地下に埋れる覚悟あるべし。

世には、餅を焼くに内は堅く外は黒く焦げたるが如く、内に旧態依然として名利我欲を蔵したるまま世に売らんとして、外観のみ新体制を装えるものあり。皇国の事、もとより衷心の忠貞を尊ぶ。功を急ぎ、名を成さんがために、己を売り世を欺くが如きことあるべからず。常に己を養い、心を充実せしめ、己が使命を全うじて、静かに地下に埋れるの覚悟を要とす。謹みて外面のみの新体制を装いて自他を欺くべからず。

九。臣道実践と念仏

私どもは、念仏の世界において、人間の本当の道を成就せられることを知る。人間は如何に真面目に生きたくつもりでも、世間だけを相手としている限り、その胸中には虚仮賢善でうわべばかりを装い飾って、その衷心には不善雑悪のままを包み隠しているという性質を持っている。しかして、その包み隠されたる心中にこそ、凡百の愚悪が潜在するのである。

国家に不忠なる心も、親に対する叛逆心も、夫婦不和の本も、自分勝手も、邪見も傲慢も、一切の悪はみなこの中に包まれていて、自らを苦しめ、人を困らすのである。しかも、この自損損他の心が、自らの意識の世界では、ますます自らを善となし、他を悪とするところの、独善、善人意識となるのである。この善人意識こそ、まことに、人の生活を暗くして、光から遠ざからしめ、人を裁きつつ、自らを少しも見せてくれないところの、内観を拒み、感謝も懺悔も絶無ならしめる心である。

こうした自分の相の上に、微塵もゴマ化すことの出来ない教えのメスが与えられて、教えの力によつて、この覆われたる伏魔殿が光の前に曝露される世界こそ、宗教の世界である。

この心内深く蔵せられた世界にこそ、我執を中軸として転廻される六道輪廻、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の因を、蔵しているのである。わけても、自他を苦しめ焼きつくすところの地獄において、八大地獄の因果を示されたる中に、その最悪極下の相として、一番下に阿鼻地獄が説かれ、その阿鼻（無間）地獄の因を、五逆誹謗正法に求められたことは注意しなければならぬことであろう。

五逆とは、要するに父母（恩田）と三宝（福田）とに対する叛逆生活であり、誹謗正法とは、この五逆生活の底に横たわるところの正法に対するより根本的な叛逆心である。正法を無視し、普遍の道に反逆する謗法が具体相を取ったものが、すなわち五逆の極悪である。地獄を説くに当って、初めに身業の悪を示し、その底に口業の悪、更にその底に意業の悪を挙げられたところに、道義的文化的意義を持つのである。すなわち、これは、教えによつて自覚の成就する、その自覚内観の方向及び歷程を示されたものである。

我らは、仏教と日本国体との内的交渉を、この自覚の源底において見出すのである。何故ならば、五逆こそは臣民道を成就しない唯一の悪なるが故である。我が国体の精華は、教育勅語に示されてあるように、「克く忠ニ克く孝ニ億兆ヲ一ニシテ」世々その歴史を成就したところにある。この忠孝一致の道こそは、唯一無上絶対の臣道である。忠成就せずば孝ならず、孝成就せざれば忠ならず、孝は百行の基、忠は万徳の大本である。

しかるに、父を殺し母を殺す極悪劇毒は、覆蔵されたる我が、心内に底深く、無明の淵に潜んで、それより一切の地獄、餓鬼、畜生を出現せしめるのである。しかして臣道を根本的に破るのである。如何にその皮相において一悪なくとも、もしこの五逆及び謗法にして存在せんか、そこに一善の認むべき無きことを示せるもの、即ち、浄土の祖師たちであつた。

特に誹謗正法こそは衆生の根本無明であつて、個我の存在を主張して無我たらしめず、個我の幸福貪欲を主張して普遍常恒の法を無視し、一切の賢善をしてその存在を否定して、これを泥土に引き下して、自己の悪逆に同ぜしめんとする心である。正法を無視して五欲のみに終始せんとするところのこの謗法の心こそ、最も重罪である。曇鸞大師は『論註』において

「もし仏菩薩の、世間出世間の善道を説きて、衆生を教化したもうこと無くば、豈に仁義礼智信有ることを知らん耶。是の如くんば、世間の一切の善法皆断じ、出世間の一切の賢聖皆滅しなん。汝ただ五逆罪の重たることを知りて、五逆罪の正法を無みする従り生ずることを知らず、是の故に正法を謗する人はその罪最も重し。」
知るべきである。故にもし教育にして、虚仮賢善の名利心を駆りたてて、その無自覚の底にある、この恐るべき真理への随順を拒み、道義への反逆心を内観せしめずば、賢くしてますます悪なる人をつくるであろう。大乘の経論に、これ等の心を難治の病と説き、極悪の機と示すゆえんである。

真宗念仏の世界こそは、まことに、教えに依つて無限の内観を成就し、心内深く巣くうところのこの本罪を、智慧光の前に照破して、これを断滅し、そこに大信心の境

を成就するのである。『大経』に「横に五悪趣を裁り、悪趣自然に閉づ、道に昇ること窮極無し。」と言われるのがそれである。

『改邪抄』には、

「この婆婆生死の五蘊所成の肉身未だやぶれずといへども、生死流転の本源をつなぐ自力の迷情、共発金剛心の一念にやぶれて、知識伝持の仏語に帰属するをこそ、自力を棄て、他力に帰すると名け、また即得往生ともならいはんべれ。」と説かれるのも、この無明無自覚の本源を破つて、人格の根本本質たる大信心の成就を示されたのである。

されば、この真実宗教の世界において限りなき愚悪を見出すのであり、見出さしめたる光は、その人の内面を充実せしめて、救いを成就するのである。親鸞聖人の悪人正機の真宗教がここにある。真実なる心を、我が心ならず、全く絶対他力の本願として体観する本願の宗教がここにある。

もし、それ、かかる念仏の行者を、これを客観的に見れば、彼は久遠の本罪を滅して真人格を成就せる菩薩である。正法に限りなく随順する無我の信は、晴れたる鏡の一切の花を映すが如く、君に向へば忠、親に向へば孝、兄弟に友に、等々一切の徳を可能ならしめつつ、しかも恭儉己を持って一善なきを知るものである。我らは念仏の園において、まことにかかる、いわゆる希有人を今現に見出して、念仏の世界の尊さをいよいよ讃仰せずにはいられないものである。

偽らざる臣道実践はこの念仏道において成就することを尊くも拝む者である。念仏の境を知らざる世の智者たち、昔は悪逆世を苦しめ、今は念仏の世界に出でて、親に孝に、忠勤を命とする青年に向つて「仏法を信ずる非国民」などと言いて、若人を混乱せしむることなかれ。